

経済・金融 フラッシュ

1月マネー統計

～銀行貸出は裾野の広がりが鮮明に

経済研究部 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

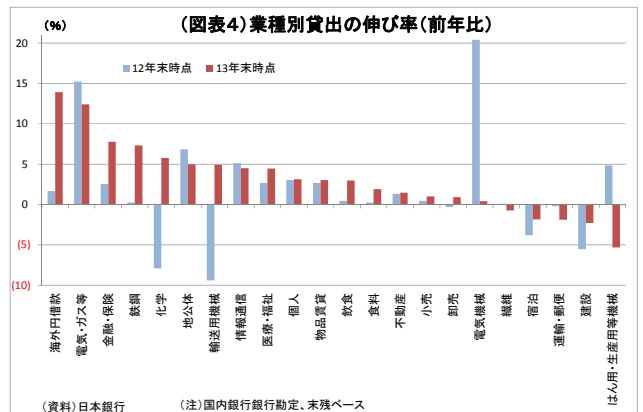
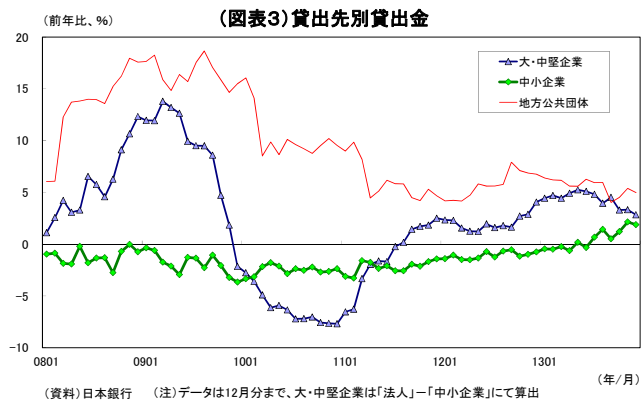
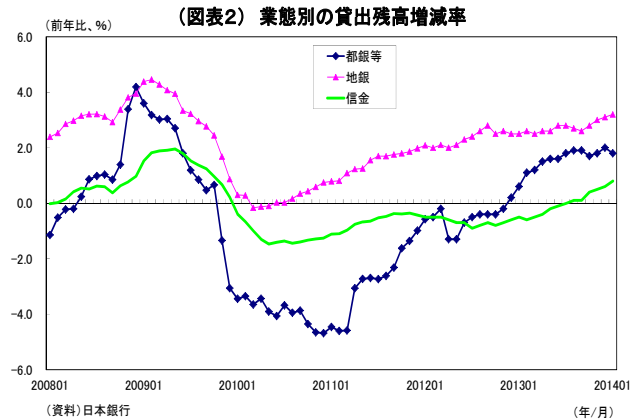
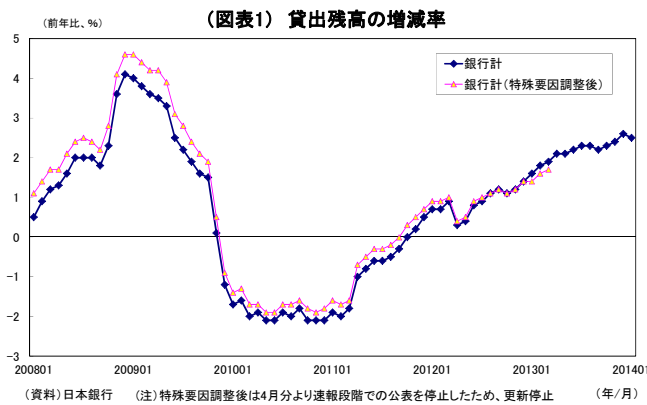
1. 貸出動向：裾野の広がりが鮮明に

日銀が2月10日に発表した貸出・預金動向(速報)によると、1月の銀行貸出(平残)の伸び率は前年比2.5%(前月は2.6%)となった。伸び率は若干縮小したが、10ヵ月連続で2%台の伸び率を維持している。

業態別の伸び率を見ると、都銀等が前年比1.8%(前月は2.0%)とやや縮小する一方で、地銀が同3.2%(前月は3.1%)と拡大している。

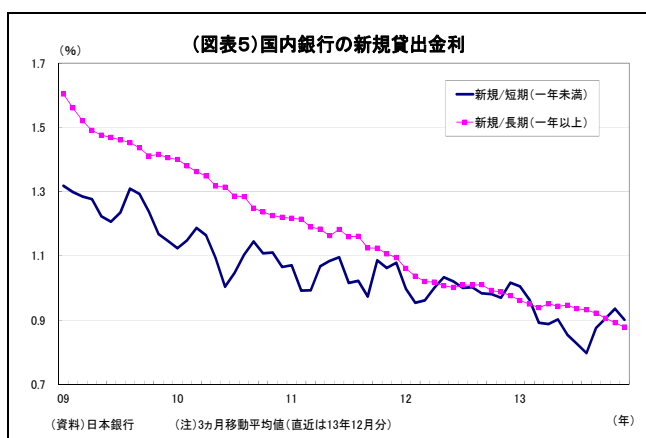
企業規模別では、従来出遅れ感が鮮明であった中小企業が昨年12月時点で6ヵ月連続の前年比プラスを維持しており、直近の伸び率は大・中堅企業と遜色ないレベルまで持ち直している(図表1～3)。

また、昨年末時点における主な業種別の前年比伸び率を見ると、22業種中15業種で一昨年末時点の伸び率を上回っており、銀行貸出の裾野の広がりが鮮明になってきている(図表4)。



一方、貸出金利の低下には未だ歯止めがかかっていない(図表5)。12月の新規貸出金利では、長期(一年以上)が0.867%と1993年の統計開始以来の最低値を小幅ながら3ヵ月連続で更新した。引き続き銀行間の競争が激しいうえ、日銀による大量国債買い入れによって、長めの国債利回りが強力に押さえ込まれているためとみられる。

どちらの要素も短期間で解消するものではなく、貸出金利の超低迷は続きそうだ。



2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：企業の資金需要は増勢強まる

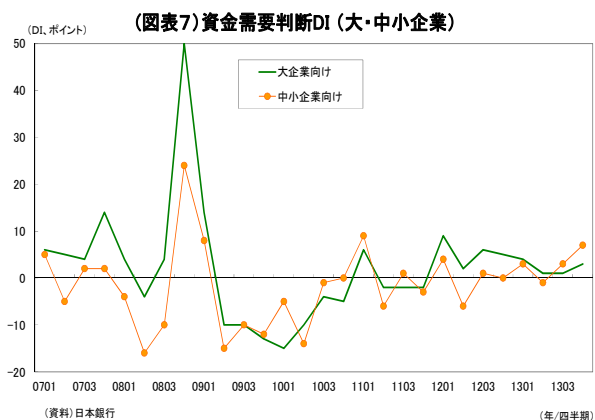
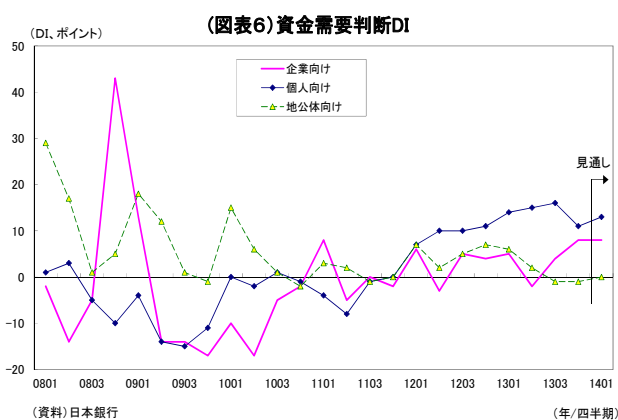
1月23日に公表された主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2013年10-12月期の(銀行から見た)企業の資金需要増減を示す企業向け資金需要判断D.I.は前回(13年7-9月期)比4ポイント上昇の8となった。前回からプラス圏(「増加」が優勢)に浮上していたが、増勢がさらに強まった形。企業向けD.I.は長らく一進一退の動きが続いてきたが、久しぶりに2期連続での上昇となった。

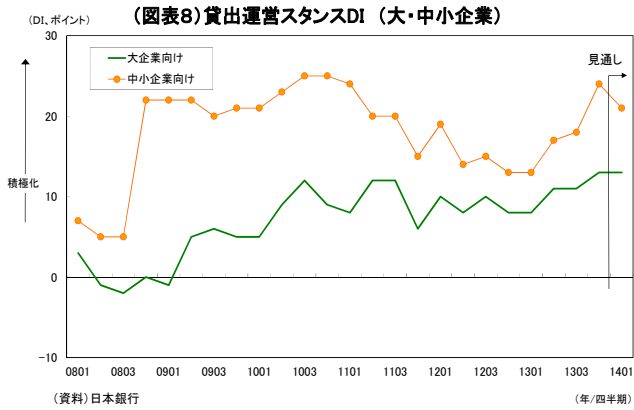
企業規模別では、大企業が3(前回比2ポイント上昇)、中小企業が7(同4ポイント上昇)とともに上昇したが、中小企業が上昇幅・水準ともに大企業を上回り、全体を牽引している。中小企業の内訳では、建設業などの非製造業の資金需要が活発化。

増加の要因は、大企業では「売上の増加(に伴う運転資金増)」ならびに「貸出金利低下」が、中小企業では「設備投資の拡大」がそれぞれ最多となっている。

個人向けD.I.は11と、前回比で5ポイント低下したが、依然として高い水準を維持しており、引き続き堅調さがうかがわれる。

今後3ヵ月の資金需要については、企業向けが8(前回比3ポイント上昇)、個人向けが13(同5ポイント低下)と、D.I.の方向感こそ分かれているが、全体的に増勢が続く見通しになっている(図表6,7)。





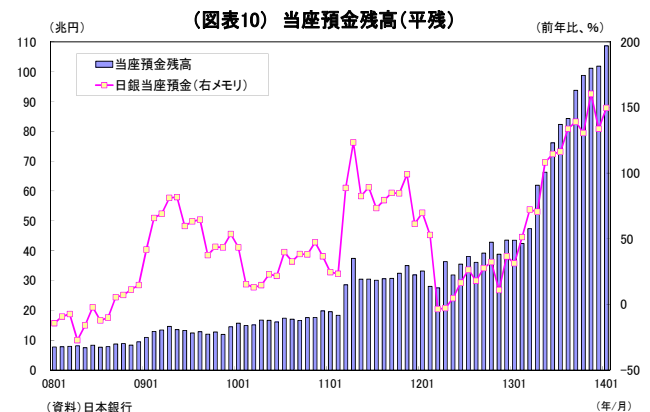
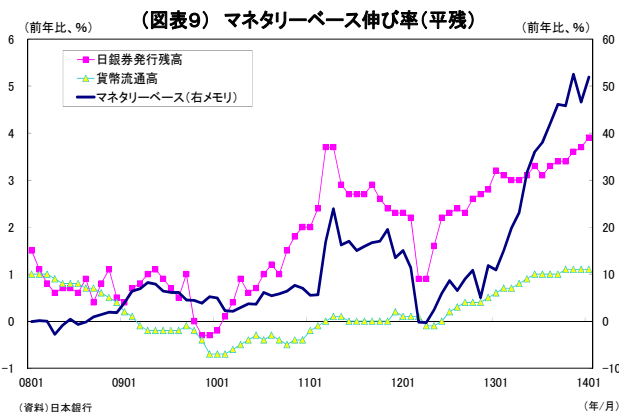
なお、銀行の貸出運営スタンス変化を示す貸出運営スタンス D.I.については従来からプラス圏(“積極化”)とする回答が優勢)の動きが続いているが、中小企業の上昇が顕著になっている(図表 8)。資金需要が特に活発化してきた中小企業を、銀行として積極的に取り込むスタンスが明確化している。

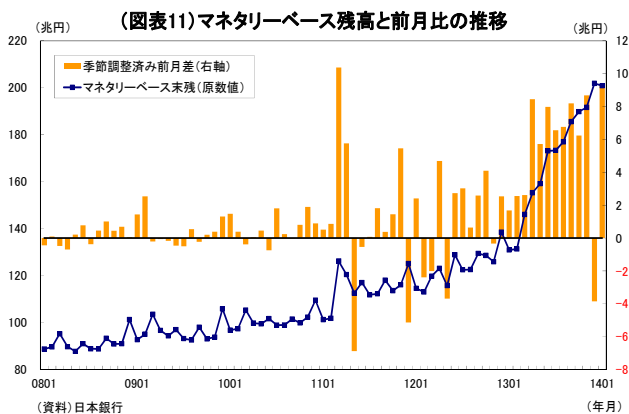
3. マネタリーベース： 堅調に増加

2月4日に発表された1月のマネタリーベースによると、日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示すマネタリーベース平残は 200.4 兆円と 11 ヶ月連続で過去最高を更新した。前年比伸び率も 51.9%(前月は 46.6%)と拡大している。日銀当座預金残高の伸び率が 149.7%(前月は 133.8%)と拡大した影響が大きい。季節調整済みのマネタリーベース(平残)も前月比で 9.3 兆円増加している。

なお、月末残のマネタリーベースで見ると、1月末は 200.9 兆円と前月末比で 1 兆円減少。減少は異次元緩和開始後初の事態となる。ただし、もともと 12 月末は資金需要が急増する時期であり、例年 1 月末にかけては反動で大幅に減少する。今回は減少幅が 1 兆円に留まっている。また、上記のとおり平残前年比や季節調整済み系列では増加基調を維持しており、堅調な増加が続いていると判断できる(図表 9~11)。

日銀は、マネタリーベースを「年間約 60~70 兆円」ペースで増加させ、14 年末に 270 兆円とする見通しを掲げている。単純に月換算すると毎月約 5.0~5.8 兆円の増加ペースとなる。上述のとおり、季節調整済みのマネタリーベース(平残)は前月比で 9.3 兆円増加しており、目標達成との兼ね合いでも順調なスタートを切ったと言える。



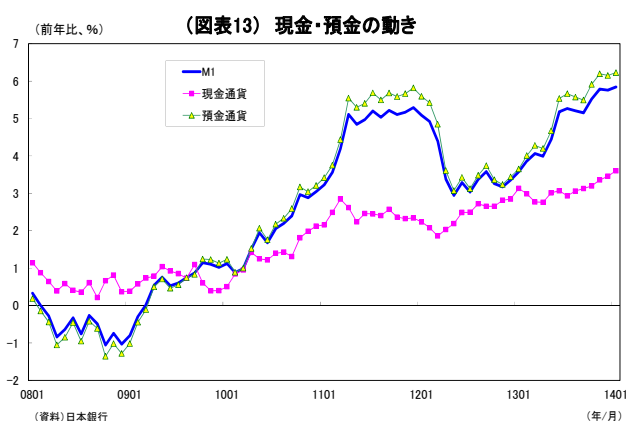
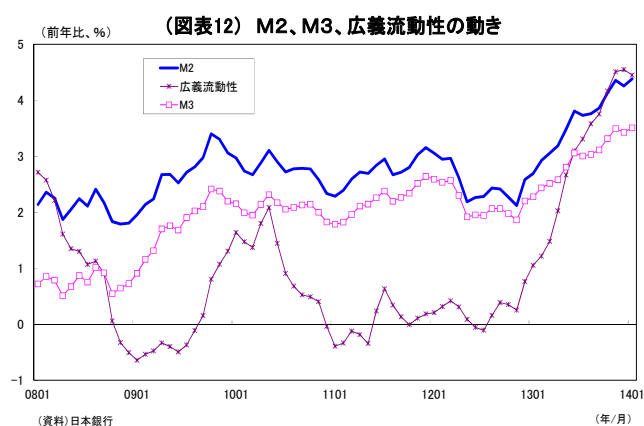


4. マネースtock: リスク回避的な動きがやや優勢に

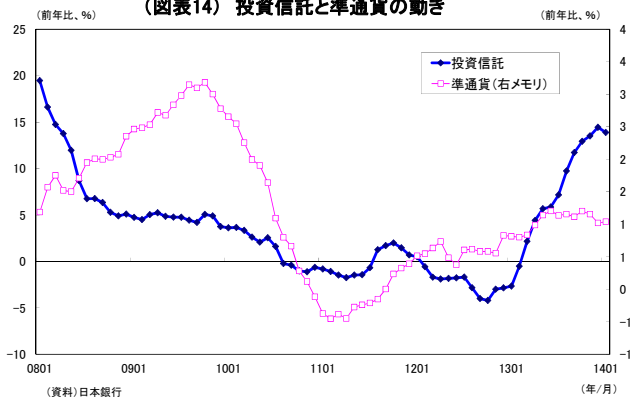
日銀が2月12日に発表した1月のマネースtock統計によると、市中通貨量の代表的指標であるM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高の伸び率は前年比4.4%(前月改定値は4.3%)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同3.5%(前月は3.4%)とそれぞれ2ヵ月ぶりに拡大した。現金通貨ならびにCDの伸び率拡大が寄与した。

一方、M3に投信や外債といったリスク性資産等を含めた広義流動性の伸び率は前年比4.4%(前月改定値は4.5%)と14ヵ月ぶりに縮小した。

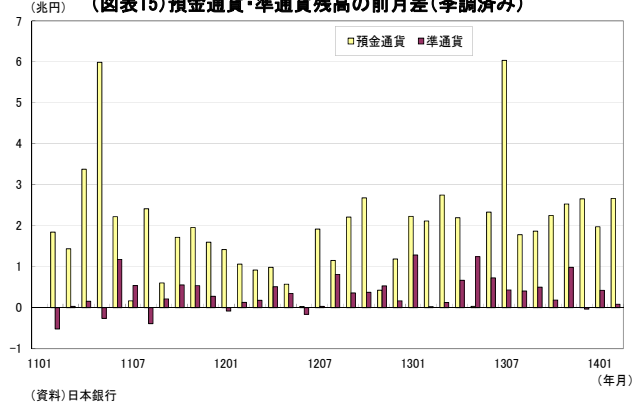
内訳を見ると、金銭の信託(前年比8.7%)の伸び率縮小が大きかったほか、投資信託(元本ベース、同13.9%)も伸び率が鈍化している。1月は株安・円高が進んだ影響で、リスク回避的な動きがやや優勢になったとみられる(図表12~15)。



(図表14) 投資信託と準通貨の動き



(図表15) 預金通貨・準通貨残高の前月差(季調済み)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。